

神田信夫・岡本敬二・石橋秀雄・松村潤・岡田英弘、五君の

「満文老檔本文篇第一卷太祖1および第二卷太祖2」に対

する授賞審査要旨

満文老檔（原本奉天崇謨閣蔵、全巻写真原板京都大学蔵）は清の太祖太宗二朝に亘る三十年間の満文の日記であつて、合計百八十巻を数える龐然たる大冊である。その内容は大小各種の政治から宮廷の秘事に至るまで極めて詳密であり、その満洲文は、若干漢語の影響を受けたものを除き、伝来の形式を保存し、満洲古語の研究資料として他に比類を見ないものである。従つて清初の歴史を探り、満洲古語を究めるに当り、老檔を除外しては到底その目的を達し得ないことは東洋史学東洋言語学にたずさわる者の周知知るところである。且つ満洲民族固有の各種法制中、軍法、裁判組織、賞罰法、刑法、土地制度その他人民の経済的生活等に関し、中国法制並びに比較法制史の研究に資すべき豊富な材料が記録されている。然るに老檔は甚だ難解の記録であるために、之を利用することが容易でない。それに満文の文献には満洲実録の如く漢訳の附いているものが多いが、之には全く漢訳を欠いているのである。

近年老檔の翻訳も若干出ているが、まだ完全なものを見ない。即ち金梁氏の満洲老檔秘録の如き、著者が満洲人であるに拘らず、粗略杜撰を免かれない。又わが藤岡勝二博士は一応日本語を遂行されたが、不幸にして博士の死去に遭い、完成を見なかつた。なお鶴淵一・今西春秋・三田村泰助三氏に夫々邦訳があるが、何れもその一部に過ぎないの

である。今回の邦訳は原文対照の逐語訳と意識とから成り、極めて厳密であつて、清初の歴史並びに満洲古語の研究者に多大の利便を提供するものである。

さて本書は老檔の原文及び訳文を記載する本文篇と、老檔に関する総合的研究の成果を収録する研究篇とを以て構成されているが、一昨年始めて本文篇第一巻太祖1を又昨年その第二巻太祖2を刊行し、以下巻を逐つて公表する運びとなつている。

本書の特色としては、第一には翻訳の形式で、毎頁上下二段に分ち、上段には満洲原文をメルレンドルフ式ローマ字転写法によつて揭示し、之に逐語訳を施し、下段にはその意識を記している。又原文の脱落疑義ある箇所には一々註(後刊)を加え、つとめて正確を期している。

第二には本書が口語体の訳文を用いていることである。従来の邦訳は三田村氏を除いては何れも文語体であるが、文語体では原文の意味を明確に写し難く、之に反して口語体だと原文を忠実に訳出することが出来るのである。

第三には老檔の翻訳に當つて、その内容の性質上、言語的知識と共に、歴史的知識を充分駆使していることである。即ち人名地名の固有名詞並びに官爵制度等に関する語については、漢字音に由来するものは之に相應する漢字を当て、漢字音の明かでないもの、及び満洲語と認め得るものには原文のローマ字つづりを当てている。

既刊本文篇二冊についてその訳文を通覧するに、単語一一の原義並びに文法上の關係を明かにし、全体を通じて訳語の統一がとれている。殊に乾隆以後の満洲語がその生気を失い、朝廷の政策による人為的維持により語義の上にも種々な変質を生じたのに反し、満文老檔は十七世紀前半の素樸な言語で書かれているので、訳者は乾隆以後の編輯に

かかる辞書類ばかりに依存しないで、つとめて原文の語法的検討を行い、あらゆる可能的解釈を考えた上、その中から最も妥当なものを求め、一語一語のもつニュアンスなどにまで細心の注意をはらつてゐることが認められ、又固有名詞の訳語については、清朝側の諸文献ばかりでなく、明朝及び朝鮮側のそれをも参酌して、その正確を期していることが窺われる。

満洲語の原義等の細部については、学者の間に或は異説があるかも知れない。併し今ここに難解な満文老檔翻訳の大業が完成しつゝあることは学界のため誠に慶賀に堪えない。

仄聞するところによると、満文老檔の邦訳に従事した五氏は昭和二十四年以来訳註を進めるために研究会を組織し、まず満洲語に精通する江実氏ゴウジツノカに就いて満洲語の学修に身を委だね、爾後数年の準備期間を設け、その間に満文の読破に成功し、東洋文庫蔵写真並びに新たに京都大学蔵原板からの焼付写真を底本として、日夜寢食を忘れて訳註にいそしんだのである。元来此種の事業は一人の力では成就し難い上に、学問に対する熱情と旺盛な精力とを保持する若い学徒に待たなければ到底成果を収めることが出来ないのである。吾人は五氏が今後益々奮闘努力して此大業を完遂することを念願してやまない。